

山に生かされる

―なりわいと環境の歴史学

近世の日本列島で、「山」とはどのような場所であったのか。

そこには柳田国男がとらえたような「協同互助」の共同体が存在したのだろうか。

本シンポジウムは、二人の日本近世史家が、

人びとが山にどう働きかけ、そこでどのように暮らしたのかについて、

当時の貴重な史料から、実態に迫る試みである。



〔報告〕

武井 弘一 琉球大学国際地域創造学部 教授
柳田国男以前のこと -日向国椎葉山に生きる人々-



〔報告〕

岩城 卓二 京都大学人文科学研究所 教授
「ゴミ」から「資源」を「拾う」-鉱山に生きる人々-

2022年12月10日[土]

14:00~17:00 **オンライン開催**

視聴を希望される方は、以下のURLまたは二次元コードから
事前登録をお願いいたします。

https://zoom.us/webinar/register/WN_KJPrL4XrQ1qUDutTN9gtcg



ご登録いただいたメールアドレスに追って視聴用URLが
送付されますので、シンポジウム当日はそちらのURLに
アクセスをお願いいたします。

山に生きる

—なりわいと環境の歴史学

柳田国男

柳田国男以前のこと —日向国椎葉山に生きる人々—

民俗学者として著名な柳田国男は、明治期に宮崎県椎葉村で衝撃を受けた。

「ユートピア」という奇跡に出くわしたからである。

それ以前の江戸時代のなりわいを丹念に追うことで、山の社会に「ユートピア」論の克服をめざす。

報告者



武井弘一 (たけい こういち)

琉球大学国際地域創造学部教授。

主著に『江戸日本の転換点』(NHK出版、2015年)など。

専門は日本近世史・歴史教育。

「ゴミ」から「資源」を「拾う」 — 鉱山に生きる人々 —

近世日本の鉱山には「ゴミ」から「資源」を探し出し、生活の糧にする人びとがいた。

その主役はもっぱら女性・子どもであったが、一体、何を拾っていたのであろうか？

「ゴミ」・「資源」・「拾う」から鉱山社会に生きる人々の生業・生活を考える。

報告者



岩城卓二 (いわき たくじ)

京都大学人文科学研究所教授。

近著(共編著)に『環世界の人文学』(人文書院、2021年)など。

専門は日本近世史。

司会＋コメンテーター



藤原辰史 (ふじはら たつし)

京都大学人文科学研究所。

主著に『ナチスのキッチン』(決定版)共和国、2016年)など。

専門は食と農の現代史。